

氏名	正岡 知晃
学位の種類	博士（芸術学）
学位記番号	博甲第 8742 号
学位授与年月	平成 30年 3月 23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	篆刻史観の展開を中心とした西泠印社創始者の 印学に関する研究

主査	筑波大学教授	博士（芸術学）	中村 伸夫
副査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	林 みちこ
副査	筑波大学教授	博士（芸術学）	菅野 智明
副査	大妻女子大学教授	博士（文学）	松村 茂樹

論文の内容の要旨

正岡知晃氏の博士学位論文は、中国近代に設立された篆刻団体・西泠印社の創始者とされる丁仁、葉銘、王禔、呉隱の印学観・篆刻史観の解明を目的とするものであり、あわせて彼ら創始者の印学観・篆刻史観が当時どのような位置に置かれていたかを考察するものである。その要旨は以下のとおりである。

本論文は、序章、終章の他、全6章から成る。序章では、まず西泠印社の沿革を概述するとともに、関連の先行研究について、西泠印社の社史研究や印学史・印論史研究、西泠諸家の刻風に関する研究等、論点別に回顧している。そのうえで、本論文の問題が特に西泠印社の創始者の印学観・篆刻史観の解明にあることを述べ、あわせて各章の構成について説明している。

第1章では、西泠印社創始者の印学観・篆刻史観との比較の便から、彼らの活躍する以前の印学の動向について考察している。この章では、丁仁の大叔父である丁丙、そして丁仁の外祖父にあたる魏錫曾という二人に焦点を当て、二人が編纂した印譜を手がかりに、特に西泠（浙江省杭州）を拠点に活動した印人とその流派（浙派）の取り上げ方について分析を加えている。その結果、魏錫曾については、浙派の他に鄧石如の系譜に連なる皖派も重視しつつ、浙派の主要印人を六人に限定し（西泠六家）、浙派の相対的な退潮を見通していたことを導いている。対して丁丙については、「西泠七家」や「西泠四家附存四家」といった枠組を提起し、むしろ浙派の発展と捉える向きがあったことを明らかにしている。

第2章では、丁仁の印学観・篆刻史観について考察している。この章では、特に丁仁が編纂した代表的な印譜である『西泠八家印選』、『杭郡印輯』を取り上げ、その序跋や収録印の内容に手がかりを求めている。これら序跋や収録印の分析を通して、著者は丁仁が西泠後期四家の刻風に浙派の隆盛を認め、前期四家とあわせて新たに「西泠八家」の枠組を提唱したと指摘し、特に『杭郡印輯』については、丁仁が浙派の伝統の継承とともに、新たな刻風の創造も重視していたことを導いている。また、丁仁の抱く

印学観については、浙派印人を中心とした制作本位の捉え方に、その特徴を見出している。

第3章では、葉銘の印学観・篆刻史観について考察している。この章では、特に葉銘が編纂した『鉄華齋印譜』等の自蔵印譜や、『広印人伝』等の印人小伝を手がかりに、それぞれに収録される印人の内訳や伝記の記述内容の分析を中心に考察を進めている。その結果、著者は葉銘の自蔵印譜や印人小伝が、ともに浙派の印人を高い割合で収録し、丁仁と同様に浙派中心の篆刻史観が認められることを指摘する一方、葉銘がそうした浙派を諸派とともに篆刻史全体の中で見渡し、相対的に浙派の正統を示す意識があったことを明らかにしている。また、葉銘の抱く印学観については、金石学との関わりが示唆されるものの、あくまで制作実践を中心に据えていることを、あわせて指摘している。

第4章では、王禔の印学観・篆刻史観について考察している。この章では、特に王禔の自蔵印譜『福齋蔵印』や自刻印譜『糜研齋印存』等を手がかりに、収録印人の小伝や自刻作品の側款の分析に基づき考察を進めている。その結果、著者は王禔が秦・漢と明・清を二大隆盛期と捉えつつ、とりわけ清では浙派の絶対視に偏らず、皖派とともに二大流派を見渡していた点に、その篆刻史観の特徴を指摘している。また、王禔の抱く印学観については、上記の創始者と同様に実践的な側面を重視する立場から、篆刻を他の芸文に匹敵する分野とする認識があった点を明らかにしている。

第5章では、呉隱の印学観・篆刻史観について考察している。この章では、特に呉隱の『遜齋蔵印』、『遜齋集古印存』といった自蔵印譜を手がかりに収録印人の内訳を分析する他、呉隱が諸家の印譜に寄せた序跋や、『遜齋金石叢書』、『遜齋印学叢書』等、彼が編集した叢書刊行物も分析の対象に加えつつ、考察を進めている。その結果、著者は呉隱が『遜齋蔵印』から『遜齋集古印存』へと印譜の編纂を重ねるにつれ、浙派中心の篆刻史観から、浙・皖の二派を主軸とした史観への変容が認められる点を指摘している。また、呉隱の抱く印学観については、彼が金石学の学問体系に準じた印学の体系を構想したことに基づき、特に印学の理論面での充実にその特色を見出している。

第6章では、丁仁、葉銘、王禔、呉隱の四家における印学観・篆刻史観を、それぞれ相対的に比較するとともに、西泠印社創始期、及びその後の印学の動向を眺望しつつ、そこに四家の位置付けを試みている。その結果、著者は、四家が創始期において、浙派から徐々に視野を広げ、近世・近代の篆刻史の回顧に注力したことを導き、それが、一方で隆盛した古璽印研究の動きとともに、次世代の篆刻史研究の基盤となった点を明らかにしている。

終章では、以上の各章の成果をまとめ、特に第6章で得た四家の近代印学史上の位置を本論文の結論として改めて提起している。そのうえで、本論文の研究史的意義として、従来解明されてこなかった四家の理念上の問題を扱ったこと、それによって制作実践を志向するか、学問的地位の向上を目指すかという西泠印社の方向性に関する問題にも切り込めた点等を掲げ、あわせて今後の課題として、さらなる印学資料の渉獵や、創始者四家に関する伝記資料の補充を掲げている。

審査の結果の要旨

(批評)

西泠印社は、現在の中国において最も権威のある篆刻芸術団体の一つとして定評があり、篆刻制作はもとより、学術的・理論的な研究にあっても、斯界を主導している。その創始期をめぐる研究では、著者が指摘するとおり、創始者の篆刻制作に主眼が置かれ、創始者たちが篆刻それ自体をいかに認識していたかという理念をめぐる問題は、十分に考察されてこなかった。

著者は、まず篆刻それ自体については、創始者の言葉に基づき「印学」という語で括ることとし、中でも古来の篆刻の流れに対しては「篆刻史」の語で捉え、それぞれに関する言説を、数々の稀観資料の発掘を通して拾い上げ、丹念に分析を施している。その着想の新しさと、それに応じた堅実な資料の収集・分析は、本論文において最も高く評価できる点である。

さらに著者は、創始者の見解を検討するに際し、前の時代の流れを窺いつつ(第1章)、同時代の他の動向、及び次世代の動向との比較から、近現代の篆刻研究に位置付けようと試みている(第6章)。こうした広い視野による比較研究は、今後の研究に大きく裨益することが期待される。

平成30年1月23日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。